

應する地は、下野國都賀郡日光山、信濃國など皆白めなる砂地にてよく出來るなり、植る所より南の方に並木ありて、南風の鹽氣有を防、北風の陰氣を入べし故に海邊にては長せず、植るには竹の簀をのみ、土中へ埋、鼯鼠を防べし、多作には鼯鼠を狩べし法は上卷に見へたり、實ばへの内は搭棚を低作、北を高、南を低、杉皮にて葺、椽檐の如く拵、日と大雨を除るなり、人參三四歳に至ば、葦簾或女竹を編て平にかけ置べし、雨滴人參にかゝりても苦からず、却て勢氣を益ことあり、肥は荏の實を蒔芽を生じたる時こやし、又荏の莖を土へ切ませたるもよし、又夏の内人糞を土へませ置、寒にいてさせたるを根廻へ切ませ置べし、植付たる所へ直に肥を用れば、蘆頭腐もの也、植替るには、右の肥土をませて植べし、肥過分れば種々の蟲を生ずる也、人參は夏實のり、赤くなりたる時採て土にませ、土中に埋置、十月に至て植る時、右の荏を切ませたる土を入、實を植べし、初より人糞を用るは惡し、二年めより少づ、土へませ用べし。

〔渡邊幸庵對話〕一人參之事、人形共、トサム共云、是本人參也、總て人參の生ずる所十七ヶ所あり、其内人形人參の出生は、第一朝鮮、第二中華に在、朝鮮にてはトサムといふ處也、三十里四方岩石の山にて、草木不生、皆岩石の間に、自然にごみほこりの溜り申處に出生す、人形と申は人の首の様に上太り、夫より左右の手左右の足の如く枝付て、人の形の如く也、故に人參と號す也、麓の里をトサムといふ、第二中華の人參も岩石の中に生ず、其外は土に生る也、此土に生るは人形不備不具に候枝の付やう全體にあらず、是も人參にして功大に劣れり、故にあなたにて人形トサムを用て、土に生る人參を第一日本へ渡す也、夫共に昔は人形も渡りし也、當時稀也といふ、同じ人參ながら、人形は大に違故に、トサム人形は自國にて用ひ、他國へは土に生るを渡す也、依之古は人參の煎粕を又煎じ、病氣も無之者吞て亂心せし者多し、是氣の徳厚き故也、トサムにて彼岩石の中に生ずる所、少葉立延候得者、其葉を鶴喰候故に、出生少し、青み見ゆると、斧にて岩石を打碎き